

入選

テーマ2…誰かのために、私ができること
「『助けたい』と『逃げたい』」

青森県立青森西高等学校1年 千葉友愛

「こんにちは」そう声をかけてくれたのは、隣のベッドで横になっていたおばあちゃんだった。私は夏休みに膝の手術を受け、大部屋に移ったばかりだったとき、初めて患者さんと会話をした瞬間だった。隣のおばあちゃんはたくさんお話をしてくれた。私は話しかけてくれたのが嬉しくて、自然と笑顔になった。会話の終わりに、おばあちゃんが零した言葉「私、夜痛みで唸っちゃうけどさかたたら言ってるね」。私は、言葉の意味を深く理解できなかった。でも、夜になってやっとわかった、おばあちゃんの言葉の意味を。

消灯時間をゆうに過ぎた頃、隣から呻き声が聞こえた。イヤホンを付けていても聞こえるほどの大きな呼吸だった。「痛い」と混じる声、それがずっとだった。ナースコールは押さず、ただひたすらに痛みを耐える夜だった。聞いている私も思わず逃げるように聞こえないフリをした。夜が明けるとおばあちゃんは必ず「昨日の夜はごめんね、うるさかったでしょ」と言う。私はどこまで自分のことは後回しなんだろうと、思わず眉間にしわが寄った。「辛かったらナースコールちゃんと押してね」私はその声をかけた。代わりに押すべきと分かっている、私が看護師さんと呼ぶのはお節介だ、その言葉が最善だったと自分に言い聞かせていた。数日経いても、昼間も呻くようになって、それでもナースコールは押さない。私はなんで、押さないんだろう、助けを呼ばないんだろうとずっと思っていた。おばあちゃんの唸り声を聞くたびに私は自分の無力さを知った。カーテン越しで姿が見えないから、私が勝手に判断してナースコールを押してはいけないと思った。でも本当は逃げる言い訳が欲しかった。そんなとき私の隣にいたおばあちゃんは私の正面のベッドに移動してきた。顔が見える距離になったことで、もう逃げられない

気がした。今も、おばあちゃんがいつもみたいに唸ってる。痛そう、ナースコール私が押すべき？でも看護師さんと呼んでほしくないかも、やめてって言われたらどうしよう、ナースコールを押したらなんて伝えればいい、看護師さんから迷惑って思われたら。頭の中はおばあちゃんのことを思っているようですと自分のことしか考えていなかった。ここでもまだ逃げてる自分が嫌いだ。

ふと思いついた、将来私は誰かを助けられる人になりたいこと。今日の前で苦しんでいる人を助けられずに、未来の誰かを救えるはずがない。「看護師さん呼ぶか？」私の声は微かに震えていた。おばあちゃんは目が合うと痛みで耐えながら必死に頷いた。私は平然と装いながら看護師さんに向かいのおばあちゃんが辛そうですと伝えた。その一言でも、ちゃんと助けになった。痛みが落ち着いた頃おばあちゃんはナースコールが届かなかったのだと私に話してくれた。動けないほどの痛みで耐えていたおばあちゃん。私は、彼女が助けを呼ばない理由を、自分に都合よく遠慮や我慢だと解釈していたのだ。それは逃げ続ける自分を正当化する自己中心的な解釈にすぎなかった。

おばあちゃんのためにしたナースコールを押すという小さな行動が、私自身を変えた。誰かのために動くことは、大げさなことじゃなくて、ほんの少しの勇気から始まるのだと思う。嫌われる覚悟、自分の中に潜む臆病さや葛藤を乗り越え、自分にできることを信じて差し伸べることが、人を救うことにつながるのだ。誰かのために私ができること、自分は無力なんだと嘆いている暇があるなら、今自分にできることを探すことだと思ふ。まだまだ未熟で日々学びだらけの私はまた、己自身と闘う場面がきつとあるそんなときもちゃんと逃げず向き合いたい。そういう私の一歩も、いつか未来の誰かを救い社会を変えるきっかけになると信じている。